

昭和43年 色染化学科卒業 澤木 寛 さん

日本の凧の会 尾張一宮支部 一宮凧の会 会長

一宮・稲沢 地域みっちゃく生活情報誌「くれよん」

2017 1月号 で活躍の様子が紹介されました。

巻頭特集 お正月を遊ぼう!

Close-up

日本の凧の会 尾張一宮支部 一宮凧の会 会長

澤木 寛さん

子どもたちに、凧作り
凧揚げの楽しさを伝え
日本の伝統文化を守っていききたい

和凧作りと凧揚げ遊びの継承を願う活動する

「日本の凧の会」という愛好家団体がある。

その尾張一宮支部「一宮凧の会」で会長を務めるのが澤木寛さんだ。自分で作った凧を揚げるその面白さを知ってから

「二直線にずっと夢中!!」という澤木さんに、これまでの凧作りや活動についてお聞きした。



平成28年の「凧あげ祭り」では、いちみんを138基つなげた連凧に挑戦した。紅い刺子袴にねじり鉢巻姿が粋!!



凧熱が一気にヒートアップ!!

全国にいる凧愛好家たちの間で二宮の澤木寛として知られる澤木さん。平成14年に「一宮凧の会」の会長になったが、和凧作りを本格的に始めたのはそのわずか1年ほど前からだという。

「もともと絵を描くのが好きだったこともあって、ほんの趣味程度に凧を作っていました。ある日女房に、138タワーパークで凧揚げ大会をしているから行ってみようと誘われて、出かけたらね、もうすぐにはまっちゃった(笑)」と話す澤木さん。実はその時、自作の凧はうまく揚がらなかった。「どうして自分の凧は揚がらないのか? うまく揚がる凧を作りたい」と、一気に凧作りへのめり込んでいく。

この地域に伝わる虹凧や蝉凧をこぞ存知だろうか。和凧に魅せられていった澤木さんは、それら地元の伝統凧をどうしても手に入れない。名古屋の風屋を尋ねた。ところが作り手が少なくて入手困難と言われてしまう。無い物欲しさですます欲しくなったという澤木さん。あちこちに聞いて回るうちに、偶然にも一宮に作り手がいることがわかる。作り方を教えてもらえらることに。澤木さんの「凧熱はさらにヒートアップしていった。」

「その方はもう亡くなりましたが、伝統凧の技術を確かに受け継ぐことができたと思います」と言う通り、澤木さんの作る和凧は絵も構造も素晴らしいと高い評価を得ている。「毎年5月にある田原凧まつりでは『げんか凧』に挑戦しますが、澤木の凧はいいぞとすぐ狙われる。10基用意して手元にほとんど残らないけど楽しくてね、やめられない」と話す。

こだわりの集結させた和凧

澤木さんの作る和凧の材料は、こだわりの結集だ。紙は数ある和紙の中でも、軽くて丈夫な美濃和紙と決めている。凧糸は、日本製の麻糸。のりは、保管中の虫食い防止のため和のりにあえて化学のりをほんの少しだけ加えている。



すす竹。息子さんと一緒に解体前の茅葺き家屋に行き取集した



澤木さん自慢の「虹凧」と「蝉凧」。複雑な骨の細工は、海外での注目度も高く「絶対真似できないと言われたよ」と澤木さん。ここまでの凧が作れる人は、日本国内でもごくわずかだ

風作りの部屋には数々の作品が所狭しと並び、手前の「金太郎と雷人」の三河ショーキ凧は2巻程度の大きさがある大凧。数年前50周年を迎えた日本ケテックからの依頼で同じものを2基制作。1基はアメリカへ旅立った



竹の長さを調整中。義経と弁慶を描いた約2型この凧は本号表紙にも登場いただいた

自分の作った凧を揚げる楽しさ
 風作りは、まず和紙に絵を描くことから始まる。黒い線は規ですつた墨。色づけは太陽の光を通さない顔料系の絵具は使わず、光が透過する染料を使う。絵図は江戸時代から伝わる伝統画を参考にアレンジを加えたり、オリジナルのものだったり。中学・高校時代に美術部で油絵を描いていた頃のテクニックと、50歳を過ぎてから習得した風絵の表現技術を駆使して描いていく。絵の次は、竹を割って骨を作る。そして絵に骨を貼り、糸をつければ凧が完成する。
 「風作り教室では幼稚園くらいのお子さんも上手に作りますよ」と言うように、教えてもらえれば誰でも作ることはできそう。しかし、うまく揚がるのか？「大事なものは左右対称であること。バラ

きなものだと1辺が2メートルほどあり、竹も当然その長さが必要となるのだが、「実は年々、すす竹が手に入りにくくなっていて、特に長いすす竹はとても貴重もし芽茸き屋根の解体を予定してみえるお宅があったら、解体前に観望したけると嬉しいですよ」という。



描いているのは、次回の凧あげ祭りで揚げる予定のいぢみ凧

三世代で空を仰ぐ 澤木ファミリー
 凧を作っては全国各地で行われている大会に参加し、近隣市町村で開催される凧つくり教室などにも可能な限り出かけている。

ンスのどれた凧を作れば、走らなくても、しぼをつけなくてもうまく揚がります。我々凧師は、走って凧を揚げることはしませんよ。凧を走らせて風に乗るものと思っていたが、どうやらそれは違うようだ。「空は偉大なキャンパス。そこに、思うように仕上げた自分の凧を揚げて眺めているときは、最高の気分」と澤木さん。「でも絵のうまい下手なんて、本当はどうでもよいこと。小さくても、うまくできなくても、自分の凧はやっぱり一番。凧を作って揚げることを是非楽しんでほしいですね」。

一宮風の会の主催イベントが、毎年2月の中旬に138タワーパークの風紋の広場で開催する「凧あげ祭り」だ。今年で14回目となるこのイベントには、澤木さんを慕う凧仲間や凧名人が全国から集まり、祭りを盛り上げる。「凧を通じて人とのつきあいがぐんと広がりました。凧を作って、揚げることを純粋に楽しむ仲間たちは、みんないい人ばかりです」と話す。
 澤木さんは日本代表の一人として、海外の凧イベントに参加したこともある。外国の凧は布製で、立体型のアドバルーンのようなタイプが主流。竹と和紙で

けている澤木さん。「凧揚げ大会は季節を問わずに年中どこかでやっています。最近では少し減りましたが、現役のころは年に40回近く地方に出かけていました。近年は再就職をしたが、自分の時間は現役時代と同様、そのほとんどが凧に関する時間となつていきました。「自宅近くで、時間があるときに」と揚げる時もあります。自称「凧きちです」から（笑）。自分が夢中になつていっているうちに、息子も凧に夢中になつて。そしてその息子も夢中になつた。親子で同じ趣味を楽しんで、イベントへは三世代で出かけています」と嬉しそうに話す。

きている日本の凧はとても喜ばれるという。江戸時代から正月や端午の節句に盛んに揚げられてきた凧は、まさに日本の伝統文化の一つといえる。澤木さんご子どもだつた頃は、親や兄弟に風作りを教えてもらったというが、今、凧を作る人はどれほどいるのだろうか。
 澤木さんの今後の抱負は、「凧という伝統文化を守つていくために、凧を作っている楽しさを、多くの子どもたちに伝えたい」とキツパリ。「最近の子どもはゲームやパソコンで遊んでいて下ばかり見ているけど、やっぱり上を向かないよ！ 凧揚げはいいよ、大空を見上げて遊ぶから。そこに自分の作った凧があると、自然に笑顔になるしね。話し方もその内容も気つ風の良さを感じてしまふのは、澤木さんが大空を見上げ、こよなく愛する自作の凧を揚げていふからかもしれない」。

妻の都美子さんと長男の孝孝さんと一緒に、「お父さんは家でずっと凧作りしています」と教えてくれた都美子さんも毎年干支凧を作る。寛さんが「宝だ」という孝孝さんは、保育園などで、風作り教室にも積極的に参加しています。お気軽に空を飛ばしてください！お問合せはP17



138タワーパーク ◆新春凧づくり教室◆
新春フェスタ2017
 【日時】1月3日(火)
 10:00～11:00～
 13:00～14:00～
 【定員】各回先着30組30名
 【料金】450円/組
 ※会場：問合せ等詳細はP17
 「138タワーパーク」記事参照
 昨年の様子

プロフィール
 澤木 寛(さきひろし)
 昭和25年(1950)、一宮市生まれ。愛知県立起工業高校卒業後、オイルランプの製造会社に勤務。60歳を過ぎてから和凧にはまり、以来、時間が許す限り凧を作り、各地の凧揚げ大会に参加。日本の凧の会理事一宮支部「一宮風の会」会長。田原県保存会総務一宮支部支部長も兼任。この3月で67歳になる。

一言風の会 会員大募集!
 40代～80代の男性10名が活動中! 凧を作りたい、揚げる方は、お気軽にお問合せを♪
 【会費】3,000円/年
 【所在地】一宮市田野
 【問合せ】TEL&FAX0586-78-8841(澤木)

さらなる御活躍をお祈り申し上げます。

愛知県立起工業高等学校